杜甫詩の真偽
―「狂歌行、贈四兄」札記―

後藤秋正

はじめに

『杜詩詳注』（以下、『詳注』）巻十四には「狂歌行、贈四兄」（以下、「狂歌行」）と題する一篇が収められる。

与兄行年校一歲　兄と行年校ぶるに一歲
賢者是兄愚者弟　賢者は是れ兄　愚者は弟
兄将富貴等浮雲　兄は富貴を将て浮雲に等しとし
弟窃功名好権勢　弟は功名を窃みて権勢を好む
長安秋雨十日泥　長安の秋雨　十日泥あり
我曹鞴馬聴晨鶏　我曹　馬を鞴い晨鶏を聴く
公卿朱門未開鎖　公卿の朱門　未だ鎖を開けざるに
我曹已到肩相斉　我曹　已に到りて肩相い斉しくす
吾兄睡穏方舒膝　吾が兄　睡り穏やかにして方に膝を舒べ
不襪不巾踏暁日　襪せず巾せずして暁日を踏む
男啼女哭莫我知　男は啼き女は哭するも我を知る莫し
身上須繒腹中実　身上には繒を須ち腹中には実
今年思我来嘉州　今年　我を思いて嘉州に来る
嘉州酒重花繞楼　嘉州は酒重く花　楼を繞る
楼頭喫酒楼下臥　楼頭に酒を喫み楼下に臥す
長歌短咏迭相酬　長歌　短咏　迭いに相い酬ゆ
四時八節還拘礼　四時　八節　還お礼を拘り
女拝弟妻男拝弟　女は弟の妻を拝し男は弟を拝す
幅巾鞶帯不掛身　幅巾　鞶帯　身に掛けず
頭脂足垢何曾洗　頭脂　足垢　何ぞ曾て洗わん
吾兄吾兄巣許倫　吾が兄よ吾が兄よ巣許の倫なり
一生喜怒長任真　一生　喜怒　長く真に任す
日斜枕肘寝已熟　日斜めにして肘を枕とし寝ぬること已に熟すれば
啾啾唧唧為何人　啾啾唧唧たるは何人為らん

この詩の制作時期について『詳注』の題下注は「此当是永泰夏、去成都之嘉・戎時作（此れ当に是れ、永泰の夏、成都を去り嘉・戎に之く時の作なるべし）。」と述べる。杜甫は永泰元年（七六五）、成都の草堂を離れて岷江を下り、嘉州へと向かった。『詳注』はその時に四兄に会った喜びを「狂歌行」に詠じたと考えたのである。こうした見解をとる論者は多い。例えば陳貽焮『杜甫評伝』（上海古籍出版社、一九八八）は、嘉州に住んでいる四兄に会ったことを、施鴻保『読杜詩説』巻十四に見える偽作説が論拠不充分であることにも触れながら、以下のように述べている。施鴻保の説については内容と関わるので後に触れる。

不日来到嘉州、見到住在這裏的一位行四的堂兄、相見喜甚、就在此稍作盤桓、歓聚暢飲、賦「狂歌行贈四兄」説、「……。」施鴻保以（一）「此詩非但腐気、且有俚気、与公詩大不類」・（二）「公在嘉州亦無幾時、与「四時八節」句不合」等為理由、認為此詩「疑是晩唐人詩誤編公集者」。存疑可也、但仍嫌論拠不足、不得貿然断定非老杜之作。

それでは「狂歌行」の作者について、これまでどのような見解が示されてきたのであろうか。諸説を検討しつつ、この問題について考えてみたい。

一

まず、「狂歌行」の制作時期についての諸説を検討しておこう。これを考える際には、杜甫が嘉州を通過し、もしくは立ち寄った時期や期間と関わって、いつ成都を離れたかが問題とされる。『詳注』は先に見たとおり、永泰（元年）の夏に成都を離れて嘉州・戎州へと向かった時の作としているが、成都を離れたのが厳武の生前であったのか死後のことなのかは明言しない。朱鶴齢『杜工部詩集輯注』「杜工部年譜」の永泰元年の条は、「正月、辞幕府帰草堂。四月、厳武卒。五月、遂離蜀南下、自戎州至渝州。六月、至忠州。秋、至雲安、居之（正月、幕府を辞して草堂に帰る。四月、厳武卒す。五月、遂に蜀を離れて南下し、戎州より渝州に至る。六月、忠州に至る。秋、雲安に至り、之に居る）。」として、厳武の死後、五月に成都を離れたと見なし、この詩を「杜工部集外詩」に収めている。これに対して浦起竜『読杜心解』「少陵編年詩目譜」はこの詩を「永泰元年春夏間」に繫年し、「去蜀」、「宿青渓駅懐張員外」の次に置いて、「離蜀南下、至戎、至渝、至忠等州（蜀を離れて南下し、戎に至り、渝に至り、忠等の州に至る）。」と言い、「此行当在厳武未卒之前（此の行は当に厳

武　未だ卒せざるの前に在るべし)。」と言う。「狂歌行」(巻二之二)の注では、「此係去成都以後詩。公留嘉非久、而四兄乃適来看者、必其赴成都相候、値公已行而追及之也(此れ成都を去りて以後の詩に係る。公　嘉に留まること久しきに非ずして、四兄は乃ち適〻来りて看る者にして、必ず其れ成都に赴きて相い候ち、公の已に行くに値いて之を追及せしなり)。」と言っている。厳武が亡くなったのは、永泰元年四月(『旧唐書』巻一一七、厳武伝)であるから、『読杜心解』によれば、杜甫が成都を離れたのは永泰元年の四月以前ということになるが、嘉州には長くは留まらなかったとする点は『杜工部詩集輯注』と同じである。曾棗荘『杜甫在四川』(四川人民出版社、一九八〇)第五章「夔府孤城落日斜」、第一節「臥病巴東久」もこの立場に立ち、杜甫には成都で書かれた厳武の死を悼む詩がないこと、「去蜀」以降の岷江を南下する途中の詩に厳武の死の影がないことなどを根拠として、「……因此我認為浦起竜的判断是正確的。」と述べている。楊倫『杜詩鏡銓』「杜工部年譜」の永泰元年の条の記述は『杜工部詩集輯注』とほとんど同じである。『銭注杜詩』「少陵先生年譜」の永泰元年の条は、「辞幕府帰浣花渓草堂。五月、離草堂南下、……(幕府を辞して浣花渓草堂に帰る。五月、草堂を離れて南下し、……)。」と述べていて、これも五月に草堂を離れたとしている。『杜甫年譜』(四川人民出版社、一九八一第二版)の永泰元年の条には、「至四月間、厳武卒、因而在成都失所憑依、乃真不得不計画出峡矣。……五月、杜甫携家離成都草堂、乗舟東下。」とある。厳武が没して庇護者を失ったために成都を離れたと考えるのである。これが大方の見方であろう。前掲『杜甫評伝』は四月の末から五月の初めに草堂を離れ、端陽節(端午節)の前に嘉州に至り、族兄杜某と一家団欒の時を持ったと述べている。このように杜甫が成都を離れた時期については、厳武が卒した四月以前とする説と、四月以降とする説とがある。陶瑞芝「杜甫離成都至嘉・戎時間考索」(「杜甫研究学刊」一九八九年第三期。のち『杜甫杜牧詩論叢』学林出版社、二〇〇五所収)はもっぱらこの問題を取り上げていて、厳武の治績を讃える「諸将五首」〈其五〉(『詳注』巻一六)などを論拠に加え、『読杜心解』と曾棗荘の説を肯定した上で、「……既然如此、那麽杜甫離開成都南游嘉・戎的具体時間当在永泰元年三月暮春以前。換句話説、在四月厳武卒之前。此論或許較另二説更令人置信。」と述べ、三月暮春以前に成都を離れたと結論づけている。いずれの説をとるにせよ、嘉州から犍為、戎州、瀘州、渝州、忠州を経て、九月には雲安に着いてい

たことは「雲安九日鄭十八携酒、陪諸公宴」（『詳注』巻一四）があることから明らかである。したがって嘉州に立ち寄ったとしても短期間の滞在であったことは確実である。

二

さて「狂歌行」の作者について最初に疑問を呈したのは、王士禎（一六三四～一七一一）ではなかろうか。その『居易録』巻七に、以下のようにある。

「村歌聒耳烏塩角、社酒柔情白練槌」、宋末『月泉吟社』中佳句也。『山居雑志』載杭人徐炬『酒譜』、乃引作少陵詩、不弁格調之類否而妄称子美、則「虢国夫人」、「杜鵑行」、「狂歌行」諸篇、妄人皆雑入杜集。又何怪乎。

「村歌　耳に聒し烏塩角、社酒　情を柔らぐ白練槌」は、宋末『月泉吟社』中の佳句なり。『山居雑志』に杭の人[1]徐炬の『酒譜』を載せ、乃ち引きて少陵の詩と作すは、格調の類否を弁ぜずして妄りに子美と称す、則ち「虢国夫人」、「杜鵑行」、「狂歌行」の諸篇は、妄人　皆な杜集に雑入す。又何ぞ怪しきや。

「烏塩角」は曲の名。「白〔玉〕練槌」は美酒の名。『月泉吟社』は宋・呉渭編、詩二巻、外編詩文二巻からなる。『山居雑志』一巻は明・王士賢の編。『酒譜』一巻は明・徐炬の編。この書については、『四庫全書総目』巻百十六に、「引拠毎多訛舛。……。以『月泉吟社』「村歌聒耳烏塩角、社酒柔情玉練槌」二句与李白「遙看漢水鴨頭緑、正似葡萄初醱醅」二句、皆為杜甫詩（引拠は毎に訛舛多し。……。『月泉吟社詩』の「村歌　耳に聒し烏塩角、社酒　情を柔らぐ玉練槌」の二句と李白の「遙かに看る漢水の鴨頭緑、正に似たり葡萄の初めて醱醅するに」の二句と、皆な杜甫の詩と為す）。」という指摘がある。「村歌……」の句は『月泉吟社』に載せる、宋・陳舜道（陳希邵）の「春日田園雑興」中の句であり、「遙看……」の句は李白「襄陽歌」（『全唐詩』巻一六六）の句である。『四庫全書総目』は『酒譜』の編集が杜撰であることを指摘しているのだが、『居易録』は「狂歌行」が「虢国夫人」などと同様に、誤って杜甫の詩とされてきたことを指摘しているのである。なお、「狂歌行」には、「裴煜所収」の注がある。王洙『杜工部集』二十巻に基づいて王琪が校定した一本には、裴煜による詩文九篇の「補遺」を付して出版した王洙編・王琪校『杜工部集（二王本）』があった。原刻本は現存せず、南宋刊本の残巻と写本のみが伝存する。[2]『居易録』に論拠は示されてはいないが、少なくとも清初には「狂歌行」の

偽作説が存在したことは確かである。論拠を示して偽作説を唱えたのは、『読杜詩説』であろう。まずこの説から検討しよう。施鴻保は「狂歌行贈四兄、注引黄生説、公七古、間有頽然自放、工拙互陳。如此詩及偪仄行、入眼頗覚腐気、総為後人嚼爛耳（狂歌行贈四兄、注に黄生の説を引く、公の七古は、間頽然として自ら放にし、工拙　互いに陳ぬる有り。此の詩及び偪仄行の如きは、眼に入るに頗る腐気あるを覚ゆ、総て後人の嚼爛と為るのみと）。」といい、次のように指摘する。

今按此詩、非但腐気、且有俚気、与公詩大不類、疑是晩唐人詩、誤編公集者。公詩題贈答、多著人姓名、即弟姪亦然、如弟豊・弟観・姪佐等、若杜位且並著姓、惟忠州使君不著名、然既著現居之官、則自可不著名。若此詩但題四兄、与通集既不同。詩云、「今年思我来嘉州」、似特来嘉州見公者、又云、「四時八節還拘礼、女拝弟妻男拝弟」、似并挈子女而来、公在嘉州亦無幾時、与「四時八節」句不合。且既挈子女而来、則下戎・渝、至夔・梓、必仍相依、何又無一語及之。即此亦可見非公詩矣。

今按ずるに此の詩は、但だ腐気あるのみに非ず、且つ俚気有り、公の詩と大いに類ず、疑うらくは是れ晩唐の人の詩、誤りて公の集に編まれし者なり。公の詩の贈答と題するは、人の姓名を著すこと多し、即ち弟姪も亦然り、弟豊・弟観・姪佐等の如し、杜位の若きは且つ並びに姓を著す、惟だ忠州使君[3]のみは名を著さず、然るに既に現居の官を著すは、則ち自ら名を著さざる可し。此の詩の但だ四兄と題するが若きは、通集と既に同じからず。詩に云う、「今年　我を思いて嘉州に来る」と、特に嘉州に来りて公に見ゆる者の似し、又云う、「四時　八節　還お礼を拘り、女は弟の妻を拝し男は弟を拝す」と、并せて子女を挈えて来るが似し、公の嘉州に在るは亦　幾時も無し、「四時八節」の句と合わず。且つ既に子女を挈えて来れば、則ち戎・渝に下り、夔・梓に至るに、必ず仍お相い依らん、何ぞ又一語の之に及ぶこと無きか。即ち此れ亦公の詩に非ざるを見る可し。

初めに引かれる黄生の説は「狂歌行」の注ではなく、「偪仄行、贈畢曜」（『杜詩説』巻一一）に付された、「公五言力追漢魏、可謂毫髪無憾、波瀾老成矣。至七言未免頽然自放、工拙互陳。而宋之陋儒、自以其才識所及、専取此種為其詩派、於公亦不能無作俑之嘆也。如「醉時歌」・「醉歌行」等詩、入眼便覚塵気、総為宋人嚼爛耳（公の五言は力

力めて漢魏を追い、毫髪も憾み無く、波瀾　老成すと謂う可し。七言に至っては未だ頽然として自ら放にし、工拙互いに陳ぬるを免れず。而して宋の陋儒は、自ら其の才識の及ぶ所を以て、専ら此の種を取りて其の詩派の為にす、公に於いては亦　作俑の嘆無きこと能わざるなり。「醉時歌」・「醉歌行」等の詩の如きは、眼に入るに便ち塵気あるを覚ゆ、総て宋人の嚼爛と為るのみ)。」という注である。黄生は、杜甫の七言詩は思うままに作った結果、巧拙入り交じっており、「醉時歌」や「醉歌行」のような卑俗な詩もある、宋代の詩人はその拙い側面を受け継いでいると批判しているのである。施鴻保は「醉時歌」や「醉歌行」等の詩と「狂歌行」とを同列に考えたために、これを冒頭に引いたのであろう。施鴻保がこの詩を晩唐の詩人の作と推測する理由は、第一に、杜甫の贈答詩の詩題には弟や甥に贈ったものでも、「宴忠州使君姪宅」(『詳注』巻一四)を例外として、姓名を記しているにも関わらず、「狂歌行」は単に「四兄」と記すのみであること、第二に、第十三句、今年、四兄が杜甫のことを思って嘉州にやって来た、第十七句、節季ごとの儀礼を欠いたことがない、というのは、杜甫の滞在がごく短期間であったこととは合わないこと、第三に、四兄が家族とともに嘉州に来たのならば、これ以降の詩に四兄が全く登場しないのは不自然である、ということである。確かに第十三句については『読杜心解』が、四兄はまず成都で杜甫に会おうとして果たさず、杜甫が既に南下したことを知って嘉州に追って来たと言っている。「狂歌行」が杜甫の詩ならばそのように考えるのが自然であろう。しかし、杜甫の詩であるとする謝思煒『杜甫集校注』(上海古籍出版社、二〇一五)も、「今年二句、按、杜甫永泰元年去成都下忠渝、或経嘉州、然亦未曾久留。疑二人未必在嘉州相見。」と述べ、短期間の嘉州滞在中に二人が出会ったことを疑問視せざるを得ないのである。

三

施鴻保の説に対する批判もあるが、次にこの詩を岑参の作とする見解を見ておこう。

曹学佺(一五七四～一六四六)の撰になる『蜀中広記』巻六十五、「酒譜」の項には、「岑参狂歌行贈四兄云」とあって、第十三句から第十六句までが引かれる。明代にはこの詩を岑参の作とする見解があったのである。その後、郭沫若『李白与杜甫』(人民文学出版社、一九七二。以下、郭説)もこの詩を岑参の作であるとしている。郭沫若の説明は多岐にわたっているので、その主張を簡潔にまとめた

李殿元・李紹先「『狂歌行』是否杜甫詩作？」（『杜甫懸案掲秘』（四川大学出版社、一九九六）の要約を参考にしょう。郭説は以下のように言う。杜甫は嘉州には長く住んだことはなく、短期間立ち寄っただけであって、旅を急いでいたために上陸しなかったのではないか。従って詩の内容とは一致しない。この詩は嘉州に長く住み、しかも「権勢」のある人の作である。詩中には、「今年　我を思いて嘉州に来る」とあるのだから、作者は一年以上は嘉州に住んでいたことになる。詩には「楼頭に酒を喫み楼下に臥す、長歌　短咏　迭いに相い酬ゆ」とあるが、このような時間は杜甫に持てなかった。それではこの詩の作者は誰かというに、第一に、この詩は岑参の作と見るべきである。第二に、杜甫は永泰元年の秋から翌二年（一一月、大暦と改元）三月までの九箇月あまり、雲安で病気のために休養を余儀なくされるが、この間に「寄岑嘉州」を書いている。「狂歌行」はこの詩に対する岑参の答詩であり、これが誤って杜甫の詩と伝えられた。

『杜甫懸案掲秘』は続けて施鴻保説と郭説を否定して杜甫の作と認める、鄧紹基『杜詩別解』（中華書局、一九八七。以下、『別解』）について述べるが、『別解』の所説については後に触れる。なお、前掲『杜甫在四川』も郭説に疑問を呈し、まず、「杜甫在途経川南時、因心緒不佳和行程匆匆、没有留下多少詩篇。……。経過嘉州時有「四兄」趕来看望杜甫、飲酒賦詩、「……。」（「狂歌行贈四兄」）郭老認為這首詩応為岑参作、誤入杜集的。（『李白与杜甫』）我対此説是有些懐疑的。」と言い、郭説の主張を三点にまとめた上で、「因此、杜甫在嘉州雖是匆匆路過、但不能拠此就否定此詩為杜甫所作。」と述べ、杜甫は嘉州を慌しく通過したことは分かるが、これだけでは杜甫の作であることは否定できないと指摘している。杜甫の詩とすることに疑問を呈したのはこれらばかりではない。曹樹銘『杜臆増校』巻六（芸文印書館、一九七一）は王嗣奭が、「此詩所謂不煩縄削而自合者（此の詩は所謂　縄削を煩わさずして自ずから合する者なり）。」と述べて、杜甫の作としていることに対して次のように疑問を呈している。

又按此係集外詩、玩読再四、可疑之処、不一而足、試分言之。公居長、有弟妹而無兄、故公集内僅多関懐弟妹之作。此詩題「四兄」、従何而来？殊為可疑。若云「従兄」、例以「不帰」云、「従弟人皆有」、則此詩題応有「従」字。若云「郷兄」、例以「送郷弟韶陪従叔朝謁」、則此詩題応有「郷」字。但並無此等字様、此可疑者一也。又詩云、「我窃功名好権勢」、与公之立

身行己、絶対不能相容、公之全部詩集可證。即此一句、已可證其為偽作、此大大可疑者二也。

杜甫は長子であり、弟妹はいても兄はいない。仮に四兄が従兄であるとすれば「不帰」（『詳注』巻六）の「従弟人皆有（従弟　人皆な有り）」のように、従の字があるはずだし、郷兄であるとすれば、「季夏、送郷弟韶陪従叔朝謁」（『詳注』巻一九）のように郷の字があるはずであるというのが第一の疑問。また「弟窃功名好権勢（弟は功名を窃みて権勢を好む）」の句は杜甫の行動理念とは相容れない、これが第二の疑問であって、偽作と判断できるというのである。後者についてはこれに反駁する見解もあるが、前者は一定の説得力を持っているのではないだろうか。この点では『詳注』が引く胡夏客の、「公之諸弟、見於詩者不一。此所贈四兄、又其諸姪也（公の諸弟、詩に見ゆる者は一ならず。此の贈る所の四兄も、又其の諸姪なり）。」という指摘は根拠に乏しいと言わざるを得ない。

四

岑参の作であることを否定し、杜甫の作とする見解も見ておく必要があろう。『別解』は『読杜詩説』や郭説に反論して、杜甫の詩であると見なし、その理由をいくつか挙げているが、最大の理由は詩題と内容が一致することであり、不明な点もあるが、結局、「兄と行年校（くらべ）ぶるに一歳、賢者は是れ兄　愚者は弟」といった表現などは「謔詞」、「狂言」であって詩の面白みを増すことを杜甫が求めたのだ、ということに尽きる。

劉開揚『岑参詩集編年箋注』（巴蜀書社、一九九五）は「初至犍為作」の注において、杜甫の作であると見なしている。劉開揚は、杜甫の行動がこの詩の第四句の内容と一致していると見なし、郭沫若や施鴻保の所説を批判し、杜甫の詩と認めているのである。劉開揚の指摘のうち留意しなければならないのは「喫」に着目していることであろう。杜甫の詩には方言がしばしば用いられることについては諸書に指摘があり、例えば南宋・孫弈『示児編』巻十、「用方言」の条では、「子美善以方言里諺点化入詩句中、詞人墨客口不絶談（子美は善く方言里諺を以て点化して詩句中に入る、詞人墨客は口に絶えて談ぜず）。」と述べて「狂歌行」の冒頭の二句を引いている。確かに劉開揚が指摘するように「喫」は杜甫の詩には六例が見えており、うち「喫酒（吃酒）」は、この詩の一例のみであって、杜甫以前の用例はないようである。また単独で「喫」を用いる例は岑参の詩にはなく、唐詩では崔国輔の「対酒」（『全唐詩』巻

一一九）に、「朦朧荊棘一鳥飛、屢唱提壺酤酒喫（朦朧荊棘　一鳥飛び、屢〻唱う提壺は酒を沽いて喫めと）」とあり、儲光羲には「喫茗粥作」（『全唐詩』巻一三六）と題する詩があるのが早い例で、杜甫以後は次第に用例が増え、賈島の「贈丘先生」（『全唐詩』巻五七四）では、「常言喫薬全勝飯、華岳松辺採茯神（常に言う薬を喫むは全く飯に勝ると、華岳の松辺　茯神を採る）」と詠じられ、白居易の「詠懐」（『全唐詩』巻四三一）では、「有詩不敢吟、有酒不敢喫（詩有るも敢えて吟ぜず、酒有るも敢えて喫まず）」と詠じられ、同じく白居易「勧酒」（『全唐詩』巻四四四）には、「帰去来、頭已白、典銭将用買酒喫（帰りなんいざ、頭　已に白し、典銭　将に用て酒を買いて喫まんとす）」とあって、中唐以降は用例が増加する。「喫」から見る限り、岑参の作であることには疑問があるが、そうであるからといって杜甫の詩とする論拠にもなるまい。中唐以降の詩人の手になる可能性もあるからである。また劉開揚は「狂歌行」が集外詩ではあるが、『文苑英華』巻三五〇、及び陳浩然本、『杜詩鏡銓』巻十八（十二の誤り）附録、さらには『草堂詩箋』（巻四〇）逸詩拾遺』に、「蘇州太守裴煜如晦所収、見『旧集補遺』」として収録されていることを杜甫の真作とする理由として挙げている。このことについても疑問が残るが、輯録の問題については最後に再度触れることにしよう。いずれにしても、以上のことから劉開揚は郭説と施鴻保の説を否定し、『杜臆』や『読杜心解』の説を認めるのである。

さらに廖立「岑詩篇目異録考証」（『岑参事迹著作考』中州古籍出版社、一九九七所収）の「狂歌行」の項は劉開揚の説には言及しないが、まず岑参の歴代の詩集と選本にはこの詩が収められないこと、郭説が、この詩で作者と「四兄」とは一歳違いであると言っているのに対して、「一歳」は「一紀」の誤りであると指摘しているのは根拠がないこと、ついで岑参の排行は二十七であって、二人の兄、岑渭と岑況とは十歳以上の開きがあり、兄の排行が四ではあり得ないことを指摘している。ただし、廖立は『文苑英華』が杜甫の詩としていること、施鴻保が晩唐詩人の作であると見なしたことには言及していても、作者には触れない。

五

ここで「狂歌行」の詩題について検討しておこう。「狂歌」の語は『後漢書』巻五十三、申屠蟠伝に見える。申屠蟠はしばしば徴されたが就かず、何進が蟠と同郡の黄忠の

書翰をもって招こうとした時も答えなかった。その書翰「与申屠蟠書、勧詣何進」（『全後漢文』巻八四）に、「昔人之隠、雖遭其時、猶放声絶迹、巣棲茹薇。其不遇也、則裸身大笑、被髪狂歌（昔人の隠るるや、其の時に遭うと雖も、猶お声を放ち迹を絶ち、巣棲して薇を茹う。其の遇わざるや、則ち裸身にして大笑し、被髪して狂歌す）。」とある。もともと時世に遇わない隠者が感情を高ぶらせて狂おしく歌うことを指す語であった。詩においては初唐から見え、褚遂良「安徳山池宴集」（『全唐詩』巻三三）に、「独有狂歌客、来承歓宴余（独り狂歌の客有り、来り承く歓宴の余）」とあり、盛唐に入っても王維「輞川閒居、贈裴秀才迪」（『全唐詩』巻一二六）に、「復値接輿醉、狂歌五柳前（復た値う接輿の醉えるに、狂歌す五柳の前）」とある。この例も黄忠の書翰と同様に、『論語』微子篇の、接輿の故事を踏まえている。杜甫の詩には詩題以外に、「痛飲狂歌空度日、飛揚跋扈為誰雄（痛飲　狂歌　空しく日を度る、飛揚　跋扈　誰が為にか雄なる）」（「贈李白」、『詳注』巻一）、「耽酒須微禄、狂歌託聖朝（酒に耽りて微禄を須ち、狂歌して聖朝に託す）」（「官定後、戯贈」、『詳注』巻三）、「狂歌遇景勝、得醉即為家（狂歌す景勝に遇いしとき、醉うを得れば即ち家と為す）」（「陪王侍御宴通泉東山野亭」、『詳注』巻一一）、「休作狂歌老、廻看不住心（狂歌の老と作るを休めて、廻看せん不住の心）」（「望牛頭寺」、『詳注』巻一二）、「寇盗狂歌外、形骸痛飲中（寇盗　狂歌の外、形骸　痛飲の外）」（「陪章留後侍御、宴南楼」、『詳注』巻一二）という五例がある。『詳注』はこのうち「贈李白」以下三首に、徐幹『中論』夭寿から、「且夫賢人之道者、同帰而殊途。……或被髪而狂歌（且つ夫れ賢人の道は、帰するところを同じくして途を異にす。……或るものは被髪して狂歌す）。」という一節を引いている。(5) この語はもともと隠者の行為を表したが、取り憑かれたように詩を詠ずる、飲酒した勢いで戯れに詩を詠ずるという意味で用いられるようになったことがうかがわれる。では「狂歌行」はどうか。この詩題は『全唐詩』には巻二百三十四、杜甫の詩の「補遺」にしか見えない。宋代に入ると陸游の弟子と伝えられる蘇泂、字は召叟の「日鑄嶺下狂歌行」（『冷然斎詩集』巻二。『四庫全書』本）があり、「我生天地不如意、甚欲飄然去人世（我　天地に生まれて意の如くならず、甚だ飄然として人世を去らんと欲す）」という冒頭の句から始まる。接輿の故事を踏まえているとも考えられるが、いっぽうで蘇泂には、「夜読杜詩四十韻」（同前、巻一）があって、「夜読老杜詩、如対老杜面（夜　老杜の詩を読めば、

老杜の面に対うが如し)」と詠じ、「老杜浣花渓図引」(同前、巻二)では、「拾遺流落錦官城、故人作尹眼為青(拾遺　錦官城に流落し、故人　尹と作って眼は青を為す)」と詠ずるし、「夜読老杜星月詩二十韻」もあるので、「狂歌行」を杜甫の作と認識していたのかもしれない。その後も「狂歌行」と題する作は稀であって、明代に入っても、汪広洋、字は朝宗に、「狂歌行、為葉宗海賦」(『鳳池吟稿』巻二)があるに過ぎない。

六

「喫」については先述したので、「啾啾唧唧」の語について見ておこう。『詳注』はまず、『広韻』から「啾唧、小声也(啾唧は、小さき声なり)。」を引き、枚乗「柳賦」(『西京雑記』巻四、『全漢文』巻二〇)の「鎗鍠啾唧、蕭条寂寥(鎗鍠　啾唧、蕭条　寂寥たり)」という一節を引く。これはさまざまな音がすることに言う。また『楚辞』「離騒」から「鳴玉鸞之啾啾(玉鸞の啾啾たるを鳴らす)」という例を引く。この例は鈴の音に言う。同じ『楚辞』でも「九歌・山鬼」では、「猨啾啾兮狖夜鳴(猨は啾啾として狖は夜鳴く)」と、猿の鳴き声に用いられる。さらに『詳注』は「古捉搦歌」から、「窻中女子声唧唧(窻中の女子声唧唧たり)」という句も引いている。この歌は南朝・梁の鼓吹曲ではなく、張祜(七九二〜八五三)の「捉搦歌」(『楽府詩集』巻二五、『全唐詩』巻一八、巻五一〇)であり、「門上関、墻上棘、窻中女子声唧唧(門上の関、墻上の棘、窻中の女子　声唧唧たり)」とある。「啾啾」は猿、鳥や昆虫の鳴き声、楽器などの音に用いられ、唐詩では、黄麟「郡中客舎」(『全唐詩』巻二〇三)に、「虫響乱啾啾、更人正数籌(虫響　乱れて啾啾たり、更人　正に籌を数う)」とあり、盧象「青雀歌」(『全唐詩』巻一二二)に、「啾啾青雀児、飛来飛去仰天池(啾啾たり青雀の児、飛び来り飛び去って天池を仰ぐ)」などとある。人の発する声に用いる例は少ない。特異な例としては、鬼(亡霊)の哭する声に用いられ、王翰「飲馬長城窟行」(『全唐詩』巻二〇・一五六)に、「黄昏塞北無人煙、鬼哭啾啾声沸天(黄昏　塞北　人煙無く、鬼哭　啾啾として声　天に沸く)」とあり、杜甫「兵車行」(『詳注』巻二)に、「新鬼煩冤旧鬼哭、天陰雨湿声啾啾(新鬼は煩冤し旧鬼は哭し、天陰り雨湿うとき声啾啾たり)」とある。これを人の騒ぐ声に用いるのは、孟郊「百憂」(『全唐詩』巻三七三)に、「出処各有時、衆議徒啾啾(出処　各〻時有り、衆議　徒に啾啾たり)」とあり、白居易「香炉峰下新卜山居、草堂

初成、偶題東壁、重題」（『全唐詩』巻四三九）に、「従茲耳界応清浄、免見啾啾毀誉声（茲より耳界は応に清浄なるべく、啾啾たる毀誉の声に見うを免れん）」とあるのがその例である。「啾唧」は唐詩では、盧仝「聴蕭君姫人弾琴」（『全唐詩』巻三八九）に、「蔡琰薄命没胡虜、烏臯啾唧啼胡天（蔡琰は薄命にして胡虜に没し、烏臯は啾唧として胡天に啼く）」とあり、姚合「悪神行雨」（『全唐詩』巻四九八）に、「哮吼忽雷声掲石、満天啾唧鬧轟轟（哮吼忽ち雷ありて声　石を掲げ、天に満ち啾唧として鬧がしきこと轟轟たり）」とあるように鳥や雷に用いられる。このように「啾啾」や「啾唧」は多様な用いられ方をしているが、「狂歌行」のように人の声、しかもいびきの音に用いた例[6]は特異であり、「啾啾唧唧」の例は全く見られない。なお前掲『杜甫集校注』は「啾唧」の語に、「吵鬧声。」、騒々しい声と注し、王梵志の詩から、「忽起相羅拽、啾唧索租調[7]（忽ち起ちて相い羅拽し、啾唧として租調を索む）」という句を引く。これは役人がやかましく税を取り立てる声であろう。王梵志は盛唐期に活躍したと伝えられるので、人の声を形容する「啾唧」の語は、この頃からわずかに用いら始めたことになる。以上に見たように「啾啾唧唧」の語は用例が少なく、「啾啾」や「唧唧」、「啾唧」といった語を人の発する声に用いることは、中唐以降に増加したことが明らかであろう。

おわりに

以上見てきたように「狂歌行」には杜甫の真作と認める説、偽作と見なす説があり、偽作とする説でも、これを岑参の作とする説と晩唐詩人の作とする説に分かれることが知られる。最後に劉開揚が述べていた、この詩の収載情況について確認しておこう。

『文苑英華』巻三百五十には確かにこの詩が収録される。ただし、「贈四兄」は題下注である。「陳浩然本」とは宋・陳応行、字は浩然の撰になる類書、『杜詩六帖（杜詩新律）』十八巻のことである。この書について『詳注』は「凡例」の「杜詩偽註」の条で、「分類始於陳浩然（類を分かつは陳浩然より始まる）。」と言っている。また、陳応行には『吟窓雑録』五十巻があり、こちらは『続文献通考』巻百九十八において、「蓋委托之書、鄙俗殊甚（蓋し委托の書にして、鄙俗　殊に甚だし）。」と評されている。また『草堂詩箋』巻四十、「逸詩拾遺」には、「瞿塘懐古」、「送司馬入京」、「惜別行送劉僕射」、「呀骨行」と並んで収録され、「右五篇、乃蘇州太守裴煜如晦所収、見『旧集補遺』

（右五篇は、乃ち蘇州太守裴煜如晦の収むる所、『旧集補遺』に見ゆ。）」とある。ただし詩題は「狂歌行、贈四兄」ではなく、「短歌行、贈四兄」となっている。これは呉若本に拠ったとする『銭注杜詩』巻十八でもほぼ同様であって、こちらは「草堂詩箋逸詩拾遺」として注を付さずに引かれ、題下注に、「見陳浩然本。又見『英華』。」とあり、「狂」には「一作短」とある。「右五篇」以下も同文である。「蘇州太守裴煜如晦」とは、欧陽修とも交遊のあった裴煜、字は如晦のこと。周采泉『杜集書録』（上海古籍出版社、一九八六）の『杜工部集』二十巻の項では、「宋王洙編次并記　宋王琪校刊并後記　宋裴煜校」と説明がなされ、「其後煜又補輯遺文九篇、刊附集外。」と注記されている。つまり、「狂歌行」の出処は『旧集補遺』とされる以外は判明しないのである。しかも『旧集補遺』では「狂歌行」ではなく、「短歌行」と題されていた。このことだけでも真偽を疑う理由になろう。それでは他の諸本はどうであろうか。多くの諸本は杜甫の真作であることを前提として収録しているが、郭知達『新刊校定集注杜詩（集九家注杜詩）』（宝慶元年（一二二五）曾噩刊本）は「狂歌行」を収録しないし、黄希撰・黄鶴補注『黄氏補千家註杜工部詩史』（『黄氏補註杜詩』）にもこの詩は見えないのである。つまり、この詩を杜甫の作と断ずるにはあまりにも多くの疑問がつきまとう。

そもそも仇兆鰲が「少陵逸詩小序」（『詳注』巻二三）で、「杜詩零落人間、宋時後先継出、諸家所採、贋本頗多（杜詩　人間に零落し、宋時　後先して継ぎて出づ、諸家の採る所、贋本　頗る多し）。」と述べたように、北宋期における杜甫集編纂の過程にあって、かなりの偽作が混入した可能性が高いのである。強いて言えば、「狂歌行」は中・晩唐期以降の詩人の作とするのが真相に近いのではないだろうか。

注

（1）『四庫全書総目』巻一九三、『漢魏名家』の条には徽州の人とある。

（2）芳村弘道「杜甫集解題」（『杜甫全詩訳注（三）』（講談社学術文庫、二〇一一六）に詳しい。

（3）「宴忠州使君姪宅」（『詳注』巻一四）を指す。

（4）『全唐詩』に「一作勧。」とある。

（5）多田狷介『『中論』訳注」（『中国逍遙』汲古書院、二〇一四所収）は「被髪」以下を、「散ばら髪で気の狂ったように歌い、……。」と訳す。

（6）多くの注釈は末句を四兄のいびきの音と解しているが、『杜

臆』巻六は杜甫の様子と見なし、「末句『啾唧』、公自謂也。」と述べている。

（7）この「詩」は陳尚君輯録『全唐詩続拾』巻五（中華書局、一九九二）に張錫厚『王梵志詩校輯』を出処として収められている。

（北海道教育大学）